

Adventures of Huckleberry Finn の読み方

How Should We Read *Adventures of Huckleberry Finn* ?

山下 昇

1

Mark Twain (1835-1910) の *Adventures of Huckleberry Finn* (1885)¹⁾ は実に評価するのが難しい小説である。文学作品の正典とよばれるものが今日見直しを迫られているという事情も多少は関係しているが、この作品の場合は出版以来100年余りその評価を巡って常に意見の対立が続いている。²⁾

HF は二度に渡って「禁書」の扱いを受けているが、その理由が二度とも異なっているというところにこの作品の複雑さがある。出版当初は作品の主題そのものよりも、Huckの言葉使いや行動の下品さ不道德さが注目され、当時の「お上品な伝統」に合わないという理由で公立図書館から締め出されていて、奴隷制や人種差別に対する異議を唱えているという点はあまり議論の対象とされていない。しかしやがてこの点がはっきり認識されてくるにしたがって、*HF* は Twain の代表作、アメリカ小説の傑作と評価されるようになる。だが20世紀に入ると評価を巡る論争が起こり、とりわけ第32章以下の Phelps episodes の解釈をめぐる作品の意図や構造が論議されるようになる。そしてそれに関連する事柄として第二の「禁書」問題、即ち Jim を中心とする黒人の描き方と扱い方が近年大きくクローズ・アップされてきている。それに伴い *HF* を偉大な小説と手放しで礼賛することを留保しなくてはならないだろうという者も出てきている。³⁾ この件には1960年代の公民権運動の成果が当然に関係しているわけだが、いづれにしてもこれほど毀誉褒貶の落差が激しい作品も他に多くはない。

そのように時代によって（あるいは読者によって）異なる評価を受けるということは、この小説がいくつかの問題点または曖昧さを内包しているからである。筆者は小論において、まず作品そのものを採りあげて、①*HF* の構造、②Huckの人物像、③黒人像、の3点を中心に問題点を整理して私見を述べ、最後に *HF* と Twain を取り巻く社会的背景を考察することによって、この作品の評価の仕方に一方向を示そうというものである。

2

HFは13、4歳の浮浪児 Huck がミシシッピ川沿いの南部において1840年頃黒人奴隷 Jim との旅を通して経験したことを、その旅が終わってさほど時間が経過しないうちに語り手として再現（再構築）している小説である。従って Huck の経験した物語の時間と、彼が物語を語っている時間との間には数ヶ月のズレがあるのみだという設定である。実はこの設定が一つの問題である。語り手 Huck はこの物語を単に語っているのではなく、“… there ain’t nothing to *write* about”（イタリック筆者）（362）とあるように、書いていることになっている。ところが彼は学校へは数週間通っただけで、掛け算の九九も満足にできないという学力だし、最終章に至っても“I caught”（360）と言っているくらいである。その彼がこのような膨大なしかも随所においては相当に高度な英語の物語を書くことは到底不可能である。言うまでもなく本当のところはこれは1876年から1884年にかけて Twain が書いているのである。それを1840年頃に Huck が書いたのだとしているところに作者の意図または戦略がある。

このようにすることによって、作者はこれはあくまでも Huck という人物が40年余り昔という限定された時に書いた物語、過去の物語だとして、Huck に責任を負わせ Huck との距離をとっているように見える。そうすることによって作者は自分が同時代の人種差別や南部社会を書いているのではないというふりをすることができる。しかし現実には Twain は1880年頃の南部においてこの小説を執筆し、同時代の読者に向かって書いたのだから、作者のメッセージが巧妙に隠蔽されていると考えるのが当然であろう。こうした複雑な事情が、この設定のなかに含まれている。

今一つには、これが Huck という少年の経験した出来事の殆どそのままホットでリアルな報告であるという印象を与えることである。もしこれが数年後の回想であるならば、読者はそこに語り手の恣意的な話題の取捨選択や合理化があるのではないかと疑うであろう。（実際、語り手 Huck は取捨選択をおこなっている。第18章、Grangerford-Shepherdson feud については、“I don’t want to talk about the next day. I reckon I’ll cut it pretty short.”（151），“I ain’t agoing to tell all that happened …”（153）と述べている。）だがこの小説の設定では、語り手は自分の経験した出来事を整理する間もなく生のままに物語っていると理解されやすい。つまりこれは語り手 Huck の等身大の物語であり、彼の感受性を描いているのだということで、読者に強いインパクトを与えることになる。

このように現実的で本当の話だとして強い衝撃を読者に与えたいと思う一方で、これは作者の関与しない事柄ですよというふりをするという大変困難なことをやろうとしているためにこの小説が入り組んだ設定となっているのだが、これが誤解を産むもとであり、評

価が異なってくる原因である。1840年代と1880年代、語り手 Huck と作者 Twain の錯綜した関係が具体的な出来事または人物を描く際にどういうふうにも焦点を結ぶかによって、*HF* のいくつかの場面や人物造形は議論的となるのである。その典型的なものが Phelps episodes である。

HF 32章以下のいわゆるエンディングの部分の解釈や評価を巡っては永年に渡って論議がなされている。1935年の Ernest Hemingway の否定的な評価を始めとして、Leo Marx, Louis Budd 等この部分が作品の欠点であることを指摘する論者も多い。一方 T. S. Eliot, Lionel Trilling を先頭に、George Carrington Jr., Russell J. Reising らのようにこれを擁護し、更には積極的に肯定するものもいる。

否定派は、Huck が社会に敵対してでも奴隷 Jim を救出するという崇高なテーマがこの部分で変質し Tom Sawyer 主導のパーレスクになってしまっていることを指摘する。又 Huck や Jim が非常に受動的な人物になってしまい、おまけにプロットの上でも不自然さが目立つと不満を述べる。一方、肯定派は、Jim を救出することの中で如何に Huck が無力であるかということを描くという点からすれば首尾一貫したものであるとか、その後の歴史的展開を見れば奴隷解放が如何に茶番劇で不十分なものであるかを見事に当てこすっているのだとか主張する。また中間的な所で、“the abortive ending” だが “probably the best ending” だと述べる James Cox のような者もいる。⁴⁾

確かに否定派が不満を述べるようにこの小説を Huck の開眼物語として一貫させようとするならばエンディングの部分は失敗である。本当に Jim の解放を主眼とするなら、彼は万難を排して北上しなければならない。そしてオハイオ州に入って逃亡に成功すればそこで物語は終り。それは Jim が主人公の物語である。しかし彼は南下するばかりである。ということは少なくとも作者はそうした黒人奴隷解放を主眼とした小説を意図したのではないということである。(ただし奴隷制度のことを書こうとしている。これについては後述する。) 小説は第16章カイロを通り過ぎたことがはっきりした時点で長期に渡って執筆中断されたことがよく知られている。ということはそれから後のプロットをどう進行させるかについて作者が悩んだということだが、物語の流れとしては南下していくのが自然である。折り悪しくカヌーを失くしてしまい、彼の流れにまかせるしか為す術が無く、更には第19章で別のカヌーを見つけた時には King と Duke が飛び込んでくるというように、彼らの北上を妨げる事情が続発するのである。これは単に作者の作為的な選択であるというよりは、当時の奴隷制度下の南部においてその制度から逃れるということが極めて困難であることの反映であるとするのが妥当である。現実には忠実であろうとすればするほど彼は南下せざるを得ないというのが実状であったと思われる。

彼が南下する今ひとつの理由は、Twain の意図が南部の実態を描くということにあったと言えるだろう。例えば Jim が奴隷らしくないという批判があるように、ミズーリ

州のような周辺の南部においては奴隷制度の実態が深南部とは幾分異なっていたことが考えられる。“down South”という言葉は黒人にとっては“go to hell”という言葉と同義であった。その“down South”ヘミシシッピ川沿いに行かせてみようというのが作者のもくろみの一つである。しかしそれによって明らかにされるのは、奴隷制の実体よりは南部社会の白人の実態、即ち Grangerford-Shepherdson feud (第18章)、King & Duke の詐欺行為 (第19章-第33章)、Sheburn の Boggs 殺し (第21、22章) 等に見られる人間の愚かしさである。そしてその延長上にくるのが Tom Sawyer を巻き込んだ“setting the free negro free”という茶番的な愚行である。このエピソードに象徴されるように、深南部社会にあっては Huck のような貧乏白人少年や Jim のような黒人奴隷は全く無力である。この深南部行の中で Huck は自己の無力さを実感し、南部特有の愚かしさを発見していくとともに、人間の愚かしさに土地の違いは無いことを実感していく。その到達点が Phelps episodes である。ここには Tom が登場し、物語はほとんど冒頭のセント・ピーターズバーグの町へ戻ったようである。⁵⁾ いやフェルプス農場もセント・ピーターズバーグも同じなのだ。Miss Watson が遺言で Jim を解放したという話も唐突ではあるが、要はその結果である。Jim の解放が善意によるものであれ非常に不十分な結果しかもたらさなかったのは事実である。それは南北戦争による奴隷解放についても同じだというのが言外の意味である。⁶⁾

このように物語は奴隷制南部社会の愚かしさと怖さを Huck の経験を通して読者に示していく。作者は、物語での Huck の行動や価値判断の困難さと限界が社会と時代に規定されたものであることを示しながら、それでは1880年代の人間は自らの社会と時代にどのように規定されているか分かっているのだろうかということを同時に問うている。

3

小説のエンディングの問題と関連して議論になるのが Huck の人物像である。第31章のクライマックス部分で密告の手紙を破り捨て、“All Right, then, I’ll go to hell” (271) と決意する有名な一節によって Huck のイニシエーションとヒロイズムが明確にされるというのが従来の一般的な読みであった。だが作品の構成に関する論議とともに Huck 像の見直しが要求されている。そして虚心にテキストを読めば必ずしも彼がヒロイックな人物ではないということは明らかである。(だがそのことは彼が全然そうでないということではない。) Huck は実に心優しい少年である。その典型的な場面が Buck の死 (第18章)、Mary Jane たちへの同情 (第26-28章)、そしてリンチされる King & Duke への同情である。特に King & Duke については、散々ひどい目にあわされ Jim を売られるということまでされていながらも、できることなら彼らがリンチされないように身の危険について知

らせてやろうとさえする。

優しさとともに特筆すべきことは彼の純粋さである。無学なブワ・ホワイトの例にもれず彼も人種偏見をもっているが、それよりはあるがままに相手の人間性を受け入れるという態度が顕著である。これも有名な第15章末尾、Jim に嘘をついてからかい、罵られた後で謝罪する場面。第23章、Jim を見ていて子を思う親の気持ちは黒人も同じなのだと了解する場面など、随所で人間的な正直さを明らかにしている。

しかし一方ではその優しさや正直さの故に受動的で曖昧な部分を彼は有している。King & Duke が詐欺師であることを知っていながら敢えて彼らを追い払おうとしないし、Tom と一緒の時は殆どいつでもその手下に甘んじている。このようなHuckを評して、“characteristically irresponsible”⁷⁾ だとか、“weak fumbler”⁸⁾ とか、“helpless victim”⁹⁾ と呼び、“Huck Finn has not undergone a moral transformation.”¹⁰⁾ と決めつける者さえある。確かにそのような要素が彼の性格の中にあることは事実だが、全編を通じてそうだと言いつ切るのは無理であろう。Jim との筏の生活を通して彼が Jim の人間性に目覚めることは否定しようがない。同時に彼が人間の愚かさ醜さに目を開かれるのも確かである。次第に厭世感を強めていると言ってもいいだろう。

作者が Huck をスーパーマン的なヒーローにしようとしたのではないのも確かである。それは Huck の置かれた時代状況と社会状況を考えても現実的ではない。このことに関してある批評家は Huck を Jacksonian idealism のエンブレムだと言い、彼の頓挫がその社会的理想の挫折を表しているのだと述べている。¹¹⁾ これは傾聴すべき意見である。また Huck をとりまく現実がそのようであったからこそ容易に彼がスーパーヒーローになど成れるはずもなかったのである。アメリカ小説のヒーローの多くが逃亡型であることは諸氏の指摘を俟つまでもないが、その意味では Huck は極めてアメリカ的なヒーローであり、HF はアメリカ的な小説であるという Joyce Rowe の主張は当を得ている。¹²⁾

Huck は Tom といる時には殆ど主体性を発揮していない。これは *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) 以来のことであり、HF に至っても同様である。その Huck が一番受動性を強めるのが Phelps episodes においてである。実際この部分では彼は Huck ではないのである。Tom と間違われて彼になりすましているのだが、本当の Tom がいるのだから影のような存在でしかない。又、Huck の行動原理に関して言えば、必ずしも Tom が一緒にいない時でも彼は Tom を判断基準としている。第3章で別れて第33章で再会するまでに実に6回に渡って(第7、8、12、28、31章) Huck は「Tom ならどう思うだろうか」とか、「Tom がいてくれたら」と彼に言及している。この点に関して Tom の存在はコミック・リリーフとして必要だという者や、¹³⁾ Tom と Huck が根本的な類似性を共有しているのだという意見がある。¹⁴⁾ 確かに Tom の存在または Phelps episodes は一見したところコミック・リリーフであるように思える。しかしそのおかしさの背後に作者は周到に

批判を込めている。Tom は鉄砲で撃たれて危うく命を失うところだったし、Jim に無用な「囚人」生活を強いて、医師の言うところの“he was resking his freedom to do it [nursing]” (353) という情況にまで追いやるのである。しかもその代価として40ドル支払えば事足りるとするような拝金主義に Tom はすっかり染まっている。

このような拝金主義に人々が捕えられている様子を HF は描いているのだが、Tom のような子どもまで、あるいは部分的には Huck や Jim までが汚染されている。とりわけ HF ではそれぞれがもらった6000ドルの使い道を巡って Tom と Huck は対照的である。特に体制を上昇し支える大人になるであろうと言われる Tom のような子どもが、既にこの時点でこれほど差別的であり拝金主義に染まっていながら、全然自分の残酷さや功利主義に気付いていないことの重大さが示唆される。そしてそのような人や力の前では Huck や Jim のような人物は無力であるのが実状である。以上の点から言えば Tom と Huck の類似性という指摘は当たらないことがはっきりしている。むしろポジとネガである。

この小説のヒーローであるべき Huck が様々な経験と苦悩を経て開眼していきながらも、社会の態勢のなかではその地位を Tom に取って変わられ、フォイルに身を落とされてしまわざるを得ない、その過程を語り手 Huck は描いている。この過程の認識が語り手 Huck の諦念または受動性を生み出している。しかしそのことは直ちに Huck の「冒険」を無にするものではない。上述した通り、それによって Tom に代表されるような社会の問題点が映しだされる。またそのような傾向は時間の進行とともに強まり、Twain がこの小説を書いた1880年代になれば“Gilded Age”と呼ばれるほどその実態は明白になる。1840年の Huck の物語に1880年代の Twain が託したものは十分伝わったといえるだろう。

4

近年になって惹き起こされている第二の「禁書」事件は黒人像を巡ってである。Ralph Ellison や Julius Lester など黒人からの厳しい批判がその中心となっている。但し黒人の皆が皆そうだと言う訳ではない。*Mark Twain Journal* の黒人による HF 批評特集号¹⁵⁾でも論者の多くは Twain の黒人像に好意的である。だが批判的な立場に立つ者たちの主張には傾聴すべき点が多々ある。

Jim がステレオ・タイプで、ミンストレル・ショーの黒人すなわち黒い顔をした白人だという指摘はある意味では当を得ている。逃亡して Huck との筏の旅に出るまでの Jim は典型的な愚かな黒人である。とりわけ第2章で Tom と Huck にからかわれる彼の姿はその最たるものである。又、小説後半の Phelps episodes でも同様で、まったく Tom の悪ふざけになされるがままである。おまけに逮捕されることを覚悟のうで Tom の看護役をかってでるのである。最後に「囚人」役を果たしたご褒美として40ドルを Tom にもら

って喜んでいる姿などは卑屈とも言えそうで、黒人の読者ならば当然に腹立たしく、けしからん本だと言いたくなるであろう。

上述したような点を取りあげれば、それらがこの物語の欠点や限界となっているという事には弁護の余地がない。だがこの小説がもう一つの側面を持っていることにも注目しなくてはならない。筏の生活を通して Huck が Jim の人間性を発見していくという設定は愚かな黒人奴隷というステレオ・タイプを打ち破る機能を明確に果たしている。¹⁶⁾ 読者は Huck の経験を通して Jim の人間的な感情を明瞭に認識する。また Jim 以外の黒人に関して特筆すべきは第18章 Grangerford-Shepherdson feud の部分に登場する Jack たちである。Huck は Grangerford 家の一員のように自分専用の奴隷をあてがわれて、その奴隷を“my nigger”と呼び、そのような自分の立場や行動を受け入れている。その Jack が機知を働かせて Huck を Jim に再会させるのである。また Jim の話によれば何人かの黒人が Jim に隠れる場所をみつけてくれて、こうして Huck と会えるように計らってくれたのだということである。のみならず彼らはカヌーまで見つけて隠しておいてくれたのだという。ここには明らかに奴隷たちの連帯が見られる。逃亡奴隷が「地下鉄道」を使って北部やカナダへ脱出し自由になるという背景にはこのような奴隷たちの連帯とネットワークの存在が必ずあるのだということをこの一件は明白に示している。ただし Huck はその重要性を強くは認識していない。彼は Jim と再会できたことを喜んでいるのみである。だが Jim はこれをよく認識していて、“Dat Jack’s a good nigger, en pooty smart.” (151) と述べている。彼らの再会を秘密裡に可能にしたのは、Huck にとっては名前のない奴隷だが Jim にとっては Jack という名前のある個人でありその仲間たちである。この認識の差は、いかに Huck と Jim が互いの人間性に目覚めて交流していても、二人の間に人種の壁がある——白人がいかに黒人の世界を知らないか——ということを示している。

つまり白人の支配する世界においては黒人の世界は顕現しておらず、黒人たちは意識的無意識的に柔順で愚かな奴隷というステレオ・タイプとなって現れるのだということである。小説の最初と最後の部分に顕著に見られる Jim の姿はそのようなシステムが必然的にもたらしていると言えよう。このことを補強する例として挙げられているのが、Phelps episodes に登場する奴隷の Nat である。魔女にとりつかれたとってすっかり正気をなくしている Nat の姿は第2章の Jim と二重写しになっている。即ち Nat のようなステレオ・タイプな奴隷も白人の支配する社会を逃れれば、違う側面もっと人間的な側面が現れてくる可能性があることを、読者は Jim のケースを見てきているだけに想像しないではいられない。裏返しに言えば、Huck との筏の生活の中であれほど素晴らしい人間性を発揮した Jim が、Phelps episodes という白人支配の深南部の物語のなかで意識的であれ無意識的であれすっかりステレオ・タイプな黒人奴隷の姿に戻ってしまうのは、現実的な力関係の反映と言える。但し、彼が自分の自由を棒にふるまで Tom の看護を願

でるのは、単に主従関係が強制したものではなく彼の人間性が為せることである。この時点での Jim の行為は自由を放棄したという点で愚かであったが、人を人とも思わぬ Tom の浅薄な行動と極めて対照的で、それだけ一層 Tom への批判は強まる。

当時の黒人奴隷の実態から考えると Jim は屋外奴隷でもなく屋内奴隷でもない、随分と自由を与えられた例外的な存在で——奇妙な話で、Jim の逃亡物語が辻褃のあわない噴飯物だ——「マーク・トウェインの黒人・奴隷理解はまったくなくてない」という批判がある。¹⁷⁾ 確かにこの研究者が指摘するようなおかしな点はいくつかあるし、逃亡奴隷 Jim のヒロイックな物語を期待するむきには失望感と腹立たしきを与えるだろう。黒人読者はそのような物語を望むであろうし、黒人作家はそれを書くだろうが、Twain は Huck を通して Huck が認識したものを描いている。ここに示される Jim 像はあくまでも少年 Huck のとらえたものである。その Huck の目に映った Jim の姿は、奴隷制度という白人の支配システムの大きな力の下で自己実現を妨げられている実態と、そのシステム外ではいかに人間性が表されるかという二重の姿となっている。Huck 自身の立場からくる限界もあって、以上述べたようなことが必ずしも明確に批判的にとらえられているわけではない。それでも読者は Jim や Jack や Nat たちを通して、抑圧的な制度の下で呻吟し苦闘する黒人奴隷たちの様子を垣間見ることができる。その点から言えば、「まったくなくてない」という先の批判は一面的過ぎる。

5

構成上の事情と、語り手であり主たる登場人物の一人である Huck の人物像、Jim を中心とする黒人像、が複雑に絡み合っているこの小説の評価を困難にしているのだが、最も根本的な問題は構成上の事情に由来している。語り手 Huck と登場人物 Huck の連続性は、特に登場人物 Huck を受動的にしている。登場人物として一連の経験をした Huck が得た認識は、どこへいっても逃れられない人間の愚かさ醜さであった。そのような厭世感や無力感をもった人物が、強い実感を持ったままで今度は語り手となって語っているのだから、物語全体が悲観的な色合いを帯びているのは当然である。とりわけエンディングの Phelps episodes に至る頃には相当に氣力を失っていることが考えられるのだから、登場人物としては傍観者的な立場に矮小化されてしまうのは当然の成り行きである。

黒人像の問題では、Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1851) と同様に、物語の時代の限定と作者が書いた時代の限界という制限もあり、現代に至って不十分であるとか、ステレオ・タイプだとか、場合によれば反動的だと非難される要素が含まれていることは事実である。だが同時にそのような時代の限界のなかでステレオ・タイプを打ち破る側面も多々あり、黒人たちの実態を通して社会の圧制を映しだしてもいる。

Huck や Jim の人物像にこのような二重性またはゆらぎがあるのは、作品と作者との間にある距離のせいである。小説の世界は1840年代、Huck の語る物語である。だが実際に小説を書いたのは1880年代の Twain である。しかもこの間に南北戦争があり、小説の根本枠組みである奴隷制は廃止されている。1880年代の読者はそのことを分かっていて奴隷制下の物語を読んでいるはずである。だから逃亡奴隷を手助けする Huck の決心は小説の中で占めるほど挑戦的・反逆的には読者には映らない。むしろ肯定されるべき事柄として響くとも言えよう。だが小説に見るようにその時代にあっては社会規範を破ることは命がけのことであり大きな抵抗を受けてうちひしがれることさえある大変なことなのである。物語の語り手 Huck は1840年代の人物であり、時間を超えたパースペクティブをもっている訳ではない。彼は不安と恐怖と混乱を感じながらこの物語を語っているのだから、時代と社会の枠組みを無視して正義と理想を追及する人物を描き出し、めでたしめでたしという物語にこの小説をすることができないはずがない。せいぜいのところ、その枠に挑戦し抵抗する人物を描くことによってその枠組み（この場合は奴隷制と硬直化した南部社会）の問題点を照射するのがせいっぱいである。そしてこの点では HF は大きな成果をあげている。

だが作者はそのような地点にいる Huck から40年も隔たったところにおいて、自分の認識が Huck のものとは異なっていることを示唆している。作者は1880年代において人種差別という現実を前にして、相変わらず人々がその時代と社会の制度・思想にとらえられていることを指摘するために、その根っこである奴隷制を克服していないことを示そうとしたのである。このような意図を孕んで HF の構成がなされていると考えると、その曖昧さとも思えるものが他に方法のない選択だと言えるだろう。この点に関して Forrest Robinson は、“To read it [HF] is to be mindful of the unbroken legacy of racial discord of America ...”¹⁸⁾ だとの確に指摘している。更に一步進めて Steven Mailloux は HF の相対立する要素が読者に参加を促す rhetorical power を持っている、それ故に HF は重要な作品であると結論づけている。¹⁹⁾ これらは HF の積極的な評価の上で鍵となる重要な解釈である。

すべての作品は時代と社会のコンテクストのなかで読まれるべきだという点から言えば、この小説はそれが書かれた1880年代には奴隷制と人種差別批判という積極的側面を有していたことが了解される。1960年代の公民権運動を経た今日では、作者自身の生きた時代と社会の制限が作品の曖昧さや人物造形上の限界となっていることは否定できない。だが自分の所属する時代や社会と向き合ってその枠組の問題点を提起し批判するという点で Twain が奮闘したことは大いに評価されるべきである。HF は問題作であり挑戦的な作品である。

(本稿は1990年度相愛大学特別研究助成金による研究成果の一部である。)

注

- 1) Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1985) をテキストとして用いた。以下 *HF* と略記する。本文中の引用は同書からとし、かっこ内にページ数を記す。
- 2) *HF* 批評史は大まかに 3 期に分けて考えるのが通例である。第 1 期が出版から 20 世紀初頭、傑作として認知を受けるまで。第 2 期 1920–1949 (または 1930–1959)、論争期。第 3 期 1950–現在 (または 1960–1985)、今日的関連的論争期。詳細は John C. Garber, “Introduction: The Continuing Adventures of *Huckleberry Finn*” in *One Hundred Years of “Huckleberry Finn”* eds. Robert Sattlemeyer and J. Donald Crowley (Columbia: University of Missouri Press, 1985) (以下 *100 Years* と略記する。)、Laurie Chapman (ed.), *The Critical Response to Mark Twain’s “Huckleberry Finn”* (New York: Greenwood Press, 1991), pp. 1–9. “Introduction” 等を参照。
- 3) Wayne C. Booth, *The Company We Keep* (Berkeley: University of California Press, 1988), James Cox, “A Hard Book to Take” (*100 Years*) 等。
- 4) James Cox, “A Hard Book to Take”, pp. 396–7.
- 5) Millicent Bell, “*Huckleberry Finn* and the Sleights of Imagination” (*100 Years*), p. 134. は *HF* のプロットの cyclicity を指摘している。
- 6) Laurence B. Holland, “A ‘Raft of Trouble’ ” in *American Realism* ed. Eric J. Sundquist (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1982), p. 75. は、この点が歴史的な意義に合致していることを指摘している。
- 7) Michael Davitt Bell, “Mark Twain, ‘Realism,’ and *Huckleberry Finn*” in *New Essays on “Huckleberry Finn”* ed. Louis Budd (New York: Cambridge University Press, 1985), p. 46.
- 8) George Carrington, Jr., “Farce and *Huckleberry Finn*” (*100 Years*), p. 216.
- 9) Hamlin Hill, “*Huck Finn*’s Humor Today” (*100 Years*), p. 307.
- 10) Michael J. Hoffman, “Huck’s Ironic Circle” in *Mark Twain’s “Adventures of Huckleberry Finn”* ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1986), p. 40.
- 11) Andrew Jay Hoffman, *Twain’s Heroes, Twain’s Worlds* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1988), pp. 77–8.
- 12) Joyce A. Rowe, *Equivocal Endings in Classic American Novels* (New York: Cambridge University Press, 1988), pp. 46–74. (3. Mark Twain’s Great Evasion)
- 13) Alan Gribben, “‘I Did Wish Tom Sawyer Was There’ ” (*100 Years*), p. 168.
- 14) Lee Clark Mitchell, “The Authority of Language in *Huckleberry Finn*” in *Huck Finn* ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1990), p. 136.
- 15) *Mark Twain Journal* vol. 22, No. 2 (Fall, 1984) Black Writers on *Adventures of Huckleberry Finn* : One Hundred Years Later
- 16) Louis Budd, *Mark Twain: Social Philosopher* (Bloomington: Indiana University Press, 1962), p. 103. は Jim を最も尊敬できる人物に描くことによって、“… he resisted the rising tide of Jim Crowism.” と評価している。しかしエンディングでの Jim の扱いについては批判している。
- 17) 中島顕治 『「ハック」のアメリカ』 (京都: 山口書店, 1991)、126頁。
- 18) Forrest G. Robinson, “The Grand Evasion” in *Huck Finn*, p. 170.
- 19) Steven Mailloux, *Rhetorical Power* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1989), p. 99.